

の一例として、それを無実であり、冤罪者としての犠牲を強いられた人物だとする視点から考えれば、万人に受け入れやすい心情といえよう。筆者もこうした考え方に反論出来るだけの学識も持ち合わせていないし、又或る面でそれを否定できるものではないと考えている。

しかし、筆者は今まで述べてきたように『菅家後集』の個々の作品の流れの中から道真の心情の変遷をなぞった時、「514 謫居春雪」の詩内容が、道真自身のどうしてもおさえることの出来なかつた、あるいは超えることの出来なかつた「望京の念」の表出であるとする今までの解釈には、どうしても違和感を抱くのである。それは「513 偶作」こそが、道真の辞世の句だと考えている筆者にとって、この『菅家後集』が概ね、製作年時順に配列されていることは詩内容の吟味を通して否定する材料は見出し得ない。とすれば、「513 偶作」に続く「514 謫居春雪」には道真の詩作品に流れている詩情に深いつながりを指摘することが出来るはずである。ところが、この「513 偶作」と「514 謫居春雪」の二作品の詩風、詩情が大きく異なり、そこに大きな落差があることは既に繰り返し論じてきたことである。

つまり、ここで道真が敢えて「514 謫居春雪」を巻尾に配置した意図は、巻頭に置いている「476 自詠」との呼応関係という視点で再考してこそ、初めて見えてくるもののように思う。

その道真の意図をここで、端的に表現するは、早急すぎると思えるが、菅野氏の指摘する、個人レベルの憂いから国家のこれからの行く先を慮る「憂国の情」の表出の詩作品をというとらえ方は一つの示唆に富む考え方と思える。「514 謫居春雪」の中の「蘇武」「太子丹」が有為の人物として自国に戻ることが出来たことと裏腹に道真の場合は、太宰府謫居で罪をきせられたまま、命を落としていくことが動かし難いものになった事態の中で、敢えてこの中国古典籍の中に出て来る二人と対比させて、日本の国の為政者に向けて、有為の人材であるはずの自分を、みすみす見捨てようとする、又抹消しようとするのが、これからの日本の政情にどれほど悪影響をおよ